

速見の「土蜘蛛」と「田野」について

安部 和也

『豊後國風土記』に記されている「土蜘蛛」と「田野」について私考を記してみる。

一、土蜘蛛

土蜘蛛

『豊後國風土記』には、速見の土蜘蛛について次のように記されている。

「昔々、纏向の日代の宮に御宇しめしし天皇、球磨曾於を誅はむと欲して、筑紫に幸し、周防の國の佐婆津より発船して、渡りまして、海部の郡の宮浦に泊てたまひ。

時に、この村に女人あり、名を速津媛といひて、その処の長たりき。即ち、天皇の行幸を聞きて、親自ら迎え奉りて、奏言ししく、『此の山に大きな磐窟あり、名を

鼠の磐窟といひ、土蜘蛛二人住めり。その名を青・白といふ。又、直入の郡の禰野に土蜘蛛三人あり、その名を打猿・八田・國摩侶といふ。是の五人は、並びに為人強暴ひ、衆類も亦多にあり。悉皆、謡していへらく、皇命に従はじといへり。若し、強ちに喚さば、兵を興して距ぎまつらむ」とまをしき。ここに、天皇、兵を遣りて、其の要害を遮へて、悉に誅ひ滅ぼしたまひき。斯に因りて、名を速津媛の國といひき。後の人、改めて速見の郡といふ」

崇神天皇の没年は、通説では三二八年とされているが、天皇在位（平均）「二代十年強」と推計して、三七〇年頃の天皇（『大分県の歴史と文化』）とみられている。

崇神天皇の孫に当たる景行天皇の在位は、三九〇年頃と推計されるので景行天皇の熊襲征伐は、三九〇年代の事

件とみるべきであろう。

『豊後國風土記』の成立は、天平五年（七二三）頃が定説となっている（大分県地方史一五五号）ので、土蜘蛛の説話は事件より約三二〇年後に編述されたことになる。土蜘蛛については、日田郡石井郷・同郡五馬山・直入郡禰野・同郡躰石野・同郡宮處野・大野郡海石櫛市・同郡網磯野・速見郡の、八ヶ所に記されている。

「景行天皇熊襲征伐伝記」では、大和王朝の軍隊が先住民（倭人）の支配地を武力侵略したのに対し、倭人が頑強に抵抗し敗れた倭人は、隼人・熊襲・土蜘蛛と呼称され逆族として扱われている。このことを、「大分県の歴史と文化」（あけぼの編 賀川光夫先生著）には、「大和朝廷の祖先が日本全土の統一をめざして躍動していたころの史実を、背景として生まれた伝説である」と記されている。

また、景行天皇の九州征伐説話について大分県地方史一五五号『豊後風土記研究史』に、興味ある説が載せられているので記してみる。

「鉾山資源をめぐる大和王朝と在地勢力との確執の反映

である」（富来隆先生）

「朝鮮からの集団渡来民による定住化と、それを阻止する先住民倭人との対立の抗争の反映である」（松本清張氏）

土蜘蛛は、『日本書紀』・『古事記』・『風土記』に、西は肥前・豊後から東は常陸・陸奥までの広範囲にわたって、大和王朝軍の武力制圧に抵抗したことが記されており、これらの伝承は六世紀から八世紀に記されたもので、大和王朝が倭人を征服したとみなされている暗黒の四世紀ものが多い、だからそれ以前土蜘蛛は、弥生時代から倭人の中にあって、抵抗力の強い分子であったことが考えられると。（『日中文化研究特集』江南の文化と日本）

土蜘蛛については、『日本書紀』「神武即位前記」に「其為人也、身短而手足長……」（胴は短く手足が長い）と記されておる。その体型が蜘蛛に似ていたのでツチクモと蔑称されたことと想像される。

彼等は、鉾山に働くのに適した体型をしていたので、赤銅のヤソノタケルとも呼ばれていた。

また、彼等を物部氏に属する金属工人（鑄銅）であった

〔「白鳥伝説」谷川健一著〕との説もある。

速見の「宮浦」と「鼠の磐窟」

景行天皇を海部の宮浦で出迎えた速津媛も、もともとは土蜘蛛と同じ倭人であったが、大和王朝軍の豊後侵攻に際し他の倭人を裏切つて、従順したとも考えられる。

海部の宮浦を、南海部郡米水津宮野浦と北海部郡佐賀の関上浦とする説があるが、『風土記』には「此の村に女人あり名を速津媛といひて、その処の長たりき」と。

また、先の奏言に「此の山に土蜘蛛の住んでいる磐窟云々」と記されおり、この地方を「速津媛の國といひき。後の人、改めて速見の郡といふ」とある。

海部とは、海で生活する海人を大和王朝が特定な技能集団として編成した職業集団の意味で、五世紀末以降に始まったとされている。海部郡という地名は、律令制による行政区域（七世紀）の呼称である。しかし景行天皇が停泊した海部の郡の宮浦は、延喜式による海部郡の宮浦ではなく海人の村宮浦と解釈することができる。そこで「宮浦」と「鼠の磐窟」は、速見郡内に存在して

いたのではないかと考えられるので、以下二地点について考察を加えてみる。

宮浦

港のない古代の船舶地は、河川の入り江を利用していたので大和王朝軍船団が、停泊できた速見郡内の河川は八坂川しかない。宮浦とは、海浜に古代神を祀つた祠があった海浜と考えられる。

八坂川河口には、波崎権現祠が鎮座しており『豊後國志』は、「八坂郷原村の海浜に在り、又の名を白嵩祠とす。その地は、権現崎と名付けられ愛宕神を祀る。未だその創りを聞かず。祠の前には白砂が多くその砂は、蝗の害を除くなり」と記されている。

古代の稲作の大敵は干害・大風・蝗による虫害で、蝗は五月・六月頃に幼虫が発生し、八月に成虫となる。幼虫・成虫共に稲葉を食し、秋の緑の葉が乏しくなると稲穂の茎を咬み、収穫間近に大きな被害をもたらしていた。空一面を蔽う蝗が、一瞬のうちに稲穂を全滅させたことも珍しくなかった。〔古代日本の稲作〕武光誠・山岸良

蝗害に、ご利益のある波崎権現を祀る海岸を宮浦とすると、速津媛が景行天皇をお迎えした宮浦は、現在の杵築市権現鼻から納屋一帯の海浜が考えられる。

速津媛の村

八坂川を遡ると八坂郷本庄村がある、その地は本庄遺跡・久保田遺跡として最近発掘が行われ、古墳時代の水田面も既に検出されている。本庄・久保田遺跡の西方の高台には、七双子古墳群（古墳時代中・後期）がある。ということは、四世紀時代の八坂川河畔には、速津媛の集落が存在していたとも考えられる。

鼠の磐窟

八坂川を更に遡ると速見郡山香郷に入る。

山香郷内には多くの弥生遺跡が存在している。なかでも広瀬村の川原田遺跡と大原遺跡は、土蜘蛛青・白に閃係した遺跡ではないかと思われる。『豊後国風土記』は、速見・直入の土蜘蛛は磐窟を住居していると記されて

いる。このことは蔑視の呼称か、あるいは磐窟の周辺に集落を営んでいたかであろう。

川原田遺跡は、角礫疑灰岩の磨崖が八坂川の侵蝕によって出来た洞穴で、防空壕として使用されたため原形は破壊されているが、約四メートルの奥行きと高さ約五メートルが東西に約二〇メートルの広がりをもった洞穴で、縄文時代後期の住居跡（炉跡）と洞内から三体と洞外の運びだされた土砂の中から六体の合計九体の人骨が発見されている。発見された人骨は、体全体は小さく比較的身長をしており、前かがみの姿勢が比較的多かった生活と推定されるものであった。『山香町誌』・『大分県地方史三四号』

出土した磐窟の住民の体型が、「土蜘蛛の体型」である胸が短く手が長く鉾山で働くに適した体型をしてしている点においては、川原田遺跡の住民はまぎれもなく土蜘蛛といっても間違いなからう。

洞穴は、発掘調査後埋め戻しが行なわれ、（町教育委員会）町指定文化財の標柱（写真）が立てられておるのみで、古代磐窟の姿は確認できなかった。



川原田洞穴遺跡

洞穴の西の高台の白髭神社（祭神・猿田彦と武内宿禰）と四所神社（祭神・天照皇大神、経津主命、武甕槌神、天児屋根命）は、洞穴の住人（速見の土蜘蛛）を産土神として祀っているのではないだろうか。

川原田洞穴の北方高台の大原遺跡（山香農業高校敷地）には、弥生時代の集落跡も確認されている。（『山香町誌』）

そのほか山香郷には、縄文後期及び弥生初・中期の集落跡が点在しておる。これらの住民は、川原田遺跡の住民と同じ倭人であったと想像される。彼等は、背後に広がる広大な高原で、狩猟・採集・焼畑による食料確保を営んでいたと思われる。

『豊後國風土記』に記されている景行天皇の熊襲征伐は、「金属資源をめぐる戦い」であるとの「富来説」に従うと、つぎのことが考えられる。

大和王朝軍と速見の土蜘蛛青・白の戦いは、速見の砂金の争奪といえる。

山香町内には古くより金坑が存在し、現在の調査でも休廃坑で百十坑に達しており、「古くより砂金採取が行

われていたが如し」(『山香町誌』)とある。

立石川の砂金の採取は、四世紀當時すでに行われておつたと想像される。その砂金を狙つての大和王朝軍の速見侵攻と、砂金を固守する速見の土蜘蛛との武力闘争が、土蜘蛛青・白の説話として記されておると考えられる。

この考えから、山香郷広瀬村の川原田洞穴を速見の土蜘蛛青・白の「鼠の磐窟」。前を流れる八坂川を「砂金」採集場所。大原遺跡を彼等土蜘蛛の「集落」とする仮説は成立し、併せて景行天皇が停泊した「速見郡の宮浦」は、現在の八坂川河口の権現鼻から納屋一帯の海岸との仮説も同じく成り立つことになる。

倭人と大和王朝

景行天皇が、祖父崇神天皇の出身地九州をなぜ武力侵攻したかを考えてみる。

九州の倭人(熊襲・土蜘蛛・隼人)と大和王朝との戦いは、先住族と渡来族との戦いであると考えられる。このことは、神武天皇に端を發した皇統の流れ(神話)に、その原因が隠されている。

古代の天皇で、実在がはっきりしているのは六世紀の二六代継体天皇以降で、それ以前の天皇については判らないことが多く、さらに四世紀以前の天皇となると実在性に乏しく、初代神武天皇から八代孝元天皇までは、皇統系譜を神秘化するために創作された架空の天皇とされている。(『日本の歴史と天皇』歴史教育者協議会編)

『古代日本と海人』(黒住秀雄・薬師寺填一・藤岡章)は次のように述べている。

「中国長江下流の江南地域より、戦乱をのがれて南九州のカササノミサキに渡来した江南の海人族の話が、ニギノミコトの天孫降臨神話となった。カササノミサキ(鹿児島県笠沙町)に渡来した江南人のニギノミコトは、現地の先住族倭人の娘・コノハナサクヤヒメ(隼人)と結婚し、海幸と山幸を誕生させた。山幸の子・ウガヤフキアヘズノミコトの子が神武天皇である。

そこで開化天皇以前の歴代の天皇は、江南人と先住族との混血を先祖とする倭人系であると考えられる。

神武天皇から九代開化天皇にいたるまでの倭人系皇統も、騎馬民族系渡来人ミマキイリヒコ(九州遠賀川流域

の出自)の大和王朝樹立によって、渡来系皇統の崇神天皇が誕生した。崇神天皇の皇子・皇女のすべてには、イリヒコ・イリヒメと命名されている。このイリとは外より入るとの意味であると、多くの学者は唱えている。

一四代仲哀天皇(崇神系)の御代に倭人征伐が行われ、天皇ご自身もそれに従軍して倭人の矢を受けて戦死なされ、この戦いは王朝軍が敗退した。これを追撃する九州の倭人は、吉備勢力と連合して大和に進攻し、崇神系王朝を打ち破り一五代應神天皇を即位させて、二二代雄略天皇迄の倭人系王朝を再び樹立させた」

つまり景行天皇の九州侵攻は、その当時九州には依然として倭人が小独立国を形成して、大和王朝(崇神系)の全国統一を妨げていたからと想像される。

直入の土蜘蛛

『豊後国風土記』には、直入郡禰疑野(菅生村)に打猴・八田・國磨侶の土蜘蛛がいたと記されている。直入の土蜘蛛が棲んでいた盤窟を『豊後國志』では鬼巖屋として次のように記している。

「鬼の巖屋……直入郡柏原郷池部村に在り、懸涯絶壁高さ百余尺、前は溪流に臨み巖穴広く百人を容られる。所謂、禰疑野の三賊打猴・八田・國磨侶の巢居也」と。

鬼巖屋は、旧菅生村の北西の端熊本県との境の交通要害の地に在る。

大野川の支流馬渡川・藤渡川・滝水川に挟まれた台地上に多くの遺跡(弥生後期)が点在している。土蜘蛛が播居していた菅生村の東端の位置に七ツ森古墳群(前方後円墳・円墳)がある。同古墳群より出土した釧は、四世紀の大和王朝が認めた地方首長の証の品とされている。だが出土したその釧は、砕いて古墳内にばらまかれていた。(『大分の歴史』)

大和王朝は、反抗した倭人であっても従順すれば寛容な態度でそれを許し、日本統一後彼等の旧支配地の統治をも認めたという。(『大分県の歴史と文化』)

釧を砕いて墓内にばらまかれているということを考えると、つぎのことが想像される。

直入郡内の倭人(土蜘蛛)は、突然侵攻してきた王朝軍にたいし武力で侵攻阻止を行い多くの倭人は戦って敗れ

た。七ツ森古墳に眠る首長も、戦って敗れ不本意ながらうわべだけ従順を示して、再び旧支配地の首長として返り咲くことができた。

彼にしては、たとえうわべだけであつたにしろ他の倭人を裏切つての従順は、後悔の二字から逃れることはできなかつた。そこで彼は自分の死後、大和王朝への従順は本心ではなかつたことを示すために、「釧を砕いて墓内にまき散らすように」との遺言を残したものと推察できる。彼は死んだ後に、「倭人としての誇りと意地」を示したのであろう。

景行天皇豊後巡行の順路

大和王朝軍の豊後侵攻順路について種々の説が唱えられている。

『豊後國風土記』では、最初に海部郡宮浦に着船したとなつておるが、その宮浦が米入津か、佐賀の関の上浦か、速見郡の宮浦か、未だ確定されていない。

『日本書紀』では、佐婆津：碩田おほまた—速見邑—大野郡—直入郡—球磨曾くまそ（熊襲）國—阿蘇國—筑後國—日田郡—大

和となつてゐる。

『風土記』『書紀』ともに、國埼郡・海部郡・球珠郡の三郡には大和王朝軍は侵攻していない。球珠は別として、國崎・海部には強力な海人族の倭人が跋扈して、大和王朝軍も手が着けられなかつた。か、当時もうすでに、大和王朝の傘下に組み込まれていたかのどちらかであろう。

二、田野（白鳥伝承）

「白鳥伝承」は、「田野の白鳥物語」をはじめ全国各地に散在している。

県下に伝承されている「餅が白鳥になる」説話について記し、説話誕生の原因とその時代を考察してみる。

『豊後國風土記』速見郡の条

「田野タノ 郡コオリヒツシヤルの西南のかたにあり。此の野は広く大きく、土地沃腴得たり。開墾の便アウキ、此の土に比ツクふものなし。昔者、郡内の百姓、此の野に居りて、多く水田を開きしに、

糧に余りて、敵に宿めき。大きに奢り、已に富みて、餅
を作ちて的と為しき。時に、餅、白き鳥と化りて、発ち
て南に飛びき。當年の間に、百姓死に絶えて、水田を作
らず、遂に荒れ廃てたりき。時より以降、水田に宜しか
らず。今、田野といふ、斯其の縁なり」

— 風土記逸文（筑紫風土記） —

・餅的（存疑）

「昔、豊後ノ國球珠ノ郡ニヒロキ野ノアル所ニ、大分
ノ郡ニスム人、ソノ野ニキタリテ、家ツクリ、田ツクリ
テ、スミケリ。アリツキテ家トミ、タノシカリケリ。酒
ノミアビケルニ、トリアヘズ弓ヲイケルニ、マトノナカ
リケルニヤ、餅ヲ、リテ、的ニシテイケルホドニ、ソノ
餅、白キ鳥ニナリテトビサリニケリ。ソレヨリ後、次第
ニオトロヘテ、マドヒウセニケリ。アトハムナシキ野ニ
ナリタリケルヲ、天平年中ニ速見ノ郡ニスミケル訓邇ト
云ケル人、サシモヨクニギハヒタリシ所ノアセニケルヲ
アタラシトヤ思ヒケン、又コ、ニワタリテ田ヲツクリタ
リケルホドニ、ソノ苗ミナカレウセケレバ、オドロキオ

ソレテ、又モツクラズステニケリト云ヘル事アリ」
（逸文は文永・弘安頃（一三世紀）に記されたときな
されている「塵袋」からの引用で、存疑とあるは認めがた
きの意なり）

・尋常小学校（戦前）の國定読本の記述

昔の尋常小学校読本は、人は自然の恩恵を忘れ奢ると
必ず天罰に見舞われると教えられた。それはつぎのよう
な筋書であった。

昔々、玖珠の田野というところに、家の前に千町後に
千町の広大な田圃を持った大百姓がいた。彼を朝日長者
と呼んだ。

彼は、日没で農作業が出来なくなると、扇でお日さま
を招き寄せて日没をおくらせていたという。

ある年の初め、長者が村人を新年の祝宴に招いたとき
の出来事である。宴は終りに近づいた頃酩酊した長者は、
周りの者が止めるのも無視して、穀物神に捧げた鏡餅を
的にして矢を射たところ、的は白鳥となつて南の空に向
かって飛び去った。と同時に今迄肥沃であった水田は、

またたく間に耕作不能な土地と化してしまつた。
肥沃な田圃を無くし収入源を失つた長者一家は、没落の道を送りついには死滅したという。

・田野伝承の「朝日長者と白鳥」

…前略：朝日長者には、三人の女子のみで男子に恵ま
れなかつた。そこで、娘に筑後国から婿を迎えることに
なりその饗応の席で、鏡餅を的にして家人に矢を射させ
たところ餅は白鳥となつて飛び立っていった。この様を
見ていた村人は崇りを恐れて、氏神白鳥大明神に七日七
晩参籠して家内安全子孫長久を祈願した満願の日、一羽
の白鳥が舞い来たり次の句が書かれた羽根を落して飛び
去つた。

今日の日は西の山端にかゝるとも、

明日は照らさん天の八重雲

村人は神の怒りの解けたことを喜び引き上げた。

喉元を過ぎれば熱さ忘れるとの諺の如く、長者は次第
に驕奢がつのりついには金銀財宝を強鴨山に運び地下に
埋めた。この作業に従事した人畜を殺して大河原の湯の

近くに埋めたのであつた。これ以来大河原の湯は湧出し
なくなつた。このように非道が重なり長者の家運も衰え
稲は稔らず長者夫婦は悪病にかかつて死んだ。

前千町後千町の美田もついには荒廃と化し一家一門こ
とごとく死に絶えた。……以下略。

以上「餅が白鳥になつた」説話に、似た「白鳥物語」が
富山県に伝承されているので記してみる。

・「富山県の民話」

昔、富裕な長者が愛娘の婚礼にあたり、婿方の家に至
る道筋に鏡餅をぎしりと敷き並べさせた。婚礼の当日、
愛娘が歩いた後から道に敷いた鏡餅は白い鳥になつて順々
に羽音をたてて空の彼方に舞たつていった。以来その長
者の田畑には五穀は実らず、長者の家も亡んだという。

「白鳥物語」の誕生原因

「白鳥物語」は、人の神をも恐れぬ行為の天罰として、
今迄の肥沃な土地は収穫皆無の無田となつている。

古代人にとっての自然は、ただ畏怖すべきもので、中

でも五穀の収穫を左右する旱魃・風水害・虫害の災害を、最も恐れていた。食物を貯蔵して災害時に備えるとの手段をとらなかつた古代人は、災害で収穫が減ればその分は、狩猟採集によって補なわなければならなかつた。

縄文末期の寒冷現象は、植物の堅果を妨げそれを餌にしていた動物の生存にも影響を与え、狩猟採集による食糧は枯渇をきたしていたと想像されている。

古墳時代になると、水稲栽培は古代人の経済基盤として定着し、栽培地は拡大されていった。拡大につれて、堰や水路の建設維持管理と共同労働の指揮監督を委ねるボス（首長）が必要となつて首長が誕生した。

栽培技術も進歩して、乾田式水稲栽培が行われるようになって、地味は肥え収穫量は倍増した。それにつれて高床式倉庫も建てられて穀物の貯蔵が可能となり、生産方式も量産の方向へと移行していった。水稲は生産性が高かつたので余剰物を生み出し、その帰属分配を巡つて首長の権限は強まり階級差が生じた。

集落内の全ての権限を掌握した首長は、自己の力を過信して自然は恐れるものにあらず征服するものであると、

考え始めたのではないだろうか。五穀の感謝祭に歳神が宿る鏡餅に向かつて矢を射るとか、娘が通る道に鏡餅を敷き詰めて通すとかの、神をも恐れぬ驕奢行為に、天罰が下された説話は、水稲栽培によって裕福になつた古代人の奢りを、戒めたものと思われる。

田野の「白鳥物語」は、いつの時代の出来事か……

時代を判定することは困難なれど、ただ「糧に餘りて、畝に宿めき」と記されていることで、当時の状況を想像するとその時代がつぎのように考えられる。

古代の水稲は、「直時き」から次第に「田植え」農業になつたと言われている。水田に畝が作られておることは田植えによることを意味し、鉄鎌が五世紀に中国より伝播されてから田植え農業は普及したと想像される。

「畝に宿めき」とは、田植えされた稲株を収穫せず放置したままの状態で、その状況からして時代は五世紀以降と判断される。

一方、九重町田野伝承の「朝日長者物語」は、長者の末裔を名乗る浅井市左衛門（江戸後期の人）が著した

『田野村古伝集』には、「朝日長者先祖の事、浅井彦根太郎九代の後胤浅井長治、敏達天皇の代（六世紀）に、千町無田に入る。此君ヨリ多野千町牟田御所御館御造宮御成就被為遊御座。夫ヨリ二七九年嘉祥三年（八五〇）庚午正月婿饗應ヨリ奢初メ……天治元年（一一二四）この頃没落死絶し人々も四散する」とある。

又、「白鳥神社は勝宝三年（七五一）朝日長者が、郷里近江国浅井郡千代の松原より氏神白鳥大明神を勧請した」ともなっている。

朱鳥四年（六九〇）に、記されたとする『朝日長者縁記』には次のように記されている。

「朝日長者こと浅井長治の先祖・和葦津藤彦は、神功皇后の三韓出兵（四世紀末）に従軍し、その功によって玖珠・速見の地を賜り、欽明天皇（六世紀初期）御代に玖珠に入り、用命天皇の御代に長治に朝日長者の呼称を賜った。持統天皇（七世紀）の御代より浅井永義の家法を破つての放蕩殺生が始まり、神々の怒りをかけて段々衰微して夕日の如く消え失せた。

白鳥神社は浅井氏の始祖藤彦が、江州浅井郡千の松原白

鳥大明神の産子なるが故に、田野に勧請し奉り氏神とする」と。

『豊後國風土記』『田野伝承物語』のいずれをとつても「餅が白鳥になった」のは、六世紀の出来事と考えるのが一番妥当と思われる。

「速見の田野」は玖珠の田野か

玖珠郡の田野に「伝承白鳥物語」が存在するから、又、『筑紫風土記』逸文に比定されているからといって、『豊後國風土記』の「餅が白鳥になった」速見郡の田野を玖珠郡九重町飯田千町無田に比定することには、同意しかねる。

『九重町史』に

「飯田高原に千町無田と呼ぶ広大な湿地帯がある。『豊後國風土記』の「白鳥物語」の土地だとし、後の人は空想の翼を更に広げ朝日長者の伝説を語り続けている」と記されている。

田野を千町無田とする根拠として

一、速見没の郡（別府）の西南の地に当たる。

二、田野村の中にある。

三、白鳥神社が祀られている。
等を挙げている。

田野を速見郡として記されていることは、当時郡界が定かでなかったと片付けている学者がいるが、果たしてそうであったらうか。……

日田の郡の条に「郡の中に川あり。球珠川くすといふ。其の源は、球珠の郡の東南のかたの山（九重山）より出て、流れて石井の郷に到りた云々」とある。郡界が定かでないならば、九重山を玖珠郡とはしてはいないはずである。「餅が白鳥になった」舞台の田野は、速見郡内にあったと考えるべきと思われるが。

別府の佐藤四信先生は、田野を千町無田とするのは第二の田野であつて、本命の田野は速見郡内に存在するとしても不思議ではないと言われている。

「千町無田」説の矛盾

田野の千町無田説には、一番肝心なことが欠落してい

る。水稻栽培が標高八〇〇メートルから九〇〇メートルの千町無田で、一五〇〇年前でも可能であったとの気象・土壌・灌漑水の水稲栽培条件適合の論拠を示さないかぎり、千町無田で水稻栽培が行われていたとはならない。そこで気象、土壌、灌漑水、水稻品種の各項目について可能であったかどうかを考察してみる。

・気象条件

千町無田説は、「氣候七〇〇年周期説」を根拠にして、四世紀は温暖期にあたり気温は現在より二・三度高かったので高冷地千町無田でも水稻栽培は可能であったとしている。

だが、古代の気象を花粉分析に基づいて仮定すると、今から八千年から四千年前は最高温暖期で、年平均気温は現在より約二度高かった。四千年から一千五百年前は、現在より約一乃至二度低温の寒冷期だったと予測されていることが判った。『縄文から弥生への新歴史像』広瀬和雄編著）つまり四世紀は、科学的には温暖期ではなく寒冷期だった可能性が高い。（度は摂氏）

近年の千町無田一帯の気象は、『くじゅう総合学術調

「查報告書」に記されている「飯田高原飯田氣象觀測所氣象一覽表」の一部を、記したので参考にして古代の千町無田の氣象を想像されたい。

年間平均氣温	一〇、二度
最高氣温	二五、五度
最低氣温	マイナス四、八度
年間降水量	二二四〇ミリ
年間日照時間	一八九七時間
年間暴風日	三〇日
年間雪日	四八日
年間霜日	八四日
年間濃霧日	五四日
年間快晴日	三四日
初霜	十月二一日
終り霜	五月七日

田植え月（五月）から收穫月（十月）に至る水稻成長期の月別平均氣温は、五月が二三、九度 六月は一七、一

度 七・八月は二一、一度 九月は一七、四度 十月が一、一度となっている。

稻の成育期間は、七・八月を除けば二〇度を下回る低温で、水稻の成長に支障を及ぼしていることが判る。仮に四世紀説の「餅が白鳥になった」時が温暖期で、現在年平均氣温より二度高かったとしても、年平均氣温は一三、七度で現在の玖珠盆地内（森町）の一五、二度にも及ばない。水稻栽培氣象条件が、田野より当時も優れていたと判断される玖珠盆地でも弥生時代遺跡からは、未だ水稻栽培の痕跡は発見されていない。

よって高冷地田野で、六世紀に水稻栽培が行われていたとは信じられない。

・土壤

稻の成育には、土壤と肥培管理ひばいが不可欠である。

飯田高原の土壤は黒ボク（火山灰土）で、現在でもリン酸の施肥が重要な絶対条件とされている。はたして六世紀に現在と同じ肥培管理が出来たろうか……？低温地帯の湿地では、鳥糞のリン酸が水稻栽培を可能にしているとの説を掲げている学者がおられるが、黒ボク低温湿地

の千町無田で渡り鳥の排泄糞のみの施肥で、水稻肥培管理が十分であったとは考えられない。

灌漑水（くじゅう総合学術調査報告書）

灌漑水の湧水・流水は、豊富であるが水温は低く水口で一六度から一七度で、その上日照時間が短くて成育に必要な水温に達せず、現在でも冷害を常に受けている。

・水稻品種

日本に入ってきた南方形水稻が、高冷地千町無田で六世紀に栽培が行われていたとは到底考えられない。

東大名誉教授松尾孝嶺著『お米とともに』に、稲はいかに低温栽培が困難であるかを次のように記されている。「稲は適当な温度と日射量。適当な水分それに身体を作る栄養分があれば稲は育つ。稲の適温は三〇度付近であるが二〇度以下になると冷害を受け、さらに零度付近の低温にあうと短期間でも細胞は凍結して枯死する」と。

古代稲作について

古代稲作に関する文献は『律令』・『続日本書紀』・

『万葉集』などの奈良時代に、記されている稲作の状況

にもとづいて想像するしかない。（『古代日本の稲作』）それによると、水稻には早稲・晩稲の二種類があり早稲は九月に、晩稲は十一月に各国庁に生産量の約三％の田租を納めなければならなかった。

千町無田における水稻栽培は、現在は早期田植、早期収穫を行って寒冷気象を克服しているが、当時早稲種田租の納期九月からすると、千町無田での早稲種の栽培は不可能といえる。

大化改新前の慣用として田は、一段歩（二五〇歩）当たりの生産量によって、上田（五十束）、中田（四十束）、下田（三十束）、下下田（十五束）の五種類にわけられていた。（一束・米二升）

古代の水稻栽培は、定説としては古くは直蒔きで、しだいに田植えをするようになったという。

収穫方法は、摘み穂から根刈りが行われるようになった。五世紀に、鉄製農機具とともに稲田の水をおとして根に空気を送りこみ、根腐れを防ぐ栽培法（中干し）が中国から伝播したと推測されている。稲は雑草より繁殖力に劣るので、放置すれば栄養分は雑草に奪われて収穫

が出来ないので、除草は夏季の重要な作業であった。除草・収穫（鉄鎌）の作業効率を高めるために、今迄の直蒔き（摘み穂）栽培は田植（根刈り）栽培へと移行したと考えられる。

苗代作りから収穫して脱穀精米迄の農作業の手順は、江戸時代と大差なかったようである。

植物としての稲が大きくは変化しないのだから、その栽培に必要な作業が変わらないのが当然であろう。現代と比較しても機械力が導入された点を除けば、作業の手順に大きな変化は無い。（『古代日本の稲作』）

古代千町無田での水稲栽培の可能性

『くじゅう総合開発報告書』に次のように記されている。

一、「江戸時代に入って幾度か開田が行われたが、自然

の制約には勝てずそのつど失敗を繰り返した」

二、明治一二年田野村役所地史編に千町無田が沼であったことがつぎのように説明されている。

「田野村の東方玖珠川の幹流に跨り東西凡そ八町南北凡

そ拾九町周圍凡そ五拾四町、村用水となされとも沼中処々に鬼髪・菅等の草を生じ、鬼髪は藁に代へ繩となし菅も亦藁に代へ藁・俵・吠等を製す。寒地にして稲藁の性悪く右等の様に為し難きを以てなり」

三、一六世紀初めの田野村について、（時松正平覚書）

「正徳元年（一五〇六）長崎所司代田野村に立ち寄り見聞をしたさい山中又右衛門と申す者が案内役をしたとあり、当時は大小豆・ソバ・稗をつくり、三度の食物として稗飯・ソバ・ソバ団子汁・稗モチを食していた」と。

飯田高原千町無田には、古代の集落遺跡が発見されていない。ただ千町無田に近い歳の神前から弥生土器・須恵器片・鉄剣類の遺物が出土したとなっているが（出土状況は不明）、それをもって六世紀に千町無田で、水稲栽培をおこなっていたことにはならない。遺物は狩猟採集民が外から持ち込んだとも考えられる。

縄文時代の日本列島に、どのくらいの人口があったか推定試算として、中期で三〇万近くが住み日本列島全体が寒冷化が進んだ晩期には、一〇万人を割っていたと考えられている。ところが稲の渡来によって急速に生活力

をつけて人口を増やしていったという。『日本の歴史がわかる本』 弥生時代になって、いくら人口が急速に増加したとはいえ、六世紀に水稲栽培気象条件劣悪（わつあく）な千町無田に、あえて入植して水稲栽培を行った者はいなかったとみるべきであろう。中世になってから、修験者か落人の入植は考えられるが。縄文・弥生時代の一枚の水田の大きさは数十平方メートルの小区画であった（大阪府副万寺遺跡）と。また京都府内里遺跡で発見された五世紀の水田跡の稲株痕跡（いんせき）は、一坪当たり一二〇株であった。そして弥生時代の生産量はよくて反当たり八五キログラム、ほとんどは六四キログラム以下と想像されている。『縄文から弥生への新歴史像』

前記古代の田品（しな）を参考にして反（三百歩）収を計算すると、下下田で五四キログラム（大正十年目標反収百五十キログラム）当時の千町無田での水稲栽培が可能として予想収穫量を計算すると、広さ約一八〇町歩（田野村役所地史編）で、反あたり五四キログラムとすると約六五〇石となる。

律令時代の農民生活について標準的農家の収入は、必

要量の五分の三を満たすに過ぎず、農民の生活は貧しかった。『古代日本の稲作』

古代人は、米だけで食生活を営んだわけではなく雑穀・果実・魚介類・鳥獣肉を適宜食して米の不足を補ったと想像されるが、田野に水稲栽培農民が当時いたとすると高冷地で食糧事情不安定であったことはいなめないもので、果たしてどのような暮らし方をしていたか、想像するのにも困難である。

例『古代日本の稲作』「正倉院文書房戸標準人数」をモデルにして試算）

- 一 所帯班田額 一町二反
- 一 所帯構成人数 一〇名
- 一 所帯年間食料分 一三石
- 千町無田の一八〇町歩は一五〇所帯の班田額にあたる
- 一五〇所帯の必要食料分は一九五〇石になる
- 千町無田の生産額約六五〇石は、一五〇所帯の必要食料の約三割の数字で、七割は狩猟採集に依存しなければならなかった数値となる。（右記試算は田租・種子分は考慮していない）

古代の水田は「かたあらしの田」があったことが文献に記されている。「かたあらし」とは、一年耕すと「荒れ田」になって連作の出来なかつた田の事で、二年に一度耕作出来るとは限らなかつたらしい。

古墳時代に乾田栽培が導入されて、地味は肥え連作も可能となり生産量も向上したが、湿地では乾田栽培は、当時としては全く不可能であつたといえる。

千町無田現在の水稲栽培

飯田高原の現在行われている水稲栽培には、高冷地向けの品種改良・排水と堆肥等による土壤改良・保護苗代と湯苗の育苗・田植えの時期を早める等の寒冷地栽培技術を、血のにじむような長い年月の研究努力によって完成させ、ヤット寒冷地を克服した水稲栽培に成功したのである。(現在反収目標四八〇觔)

古代の白鳥飛来地別府

古代の白鳥説話に出てくる土地は、歴史上の記録から民間伝承に至るまで例外なく冬期に白鳥が渡来するか、

あるいは過去に渡来していた土地であることは判明している。白鳥にちなんだ地名は、そこに行けば必ず白鳥の姿が見られる場所を指して、古代の人々が名づけた呼び名であろう。

そこですべての白鳥説話は、その地に飛来する白鳥が動機になって作られたものといえる。(『白鳥の古代史』)

白鳥の女と、婚姻して生まれた子供の末裔を、自認して白鳥を始祖とする信仰をもつた古代物部氏の大移動の足跡地に、「白鳥物語」があるともいわれている。古代物部氏は、筑後川流域の高良山たかよし 一帯を出自とし、筑後川を遡って東九州に出て、神武東征より前に瀬戸内海を東進して大和に入ったと言われている。だとすると物部氏は別府を通じて瀬戸内海に出たとも考えられ、その足跡地の別府に「白鳥物語」が、存在していたとしても不思議ではない。

『豊後國志』は、鶴見山について次のように記してあ

る。「十月より二・三月の間、数百羽の鶴が飛来しておるを遠くより望むことが出来る。日中飛び舞う姿は、雪

の舞散るが如し。これを以て鶴見山とする」と。

古代人は、鶴見山を五穀神の化身白鳥が棲息する神体山として、崇めていたと考えられる。

現在の別府市大字鶴見は、延喜式によると速見郡朝見郷鶴見村となっている。そこで鶴見村は、扇山麓の湧水を利用した水田地帯が広がる鶴の越冬地で、そこに行けば鶴が見られるので古代人が鶴見と呼称したのであろう。

鶴見には、「たたら」と呼ばれる湧水地がある。「たたら」は、白鳥を鍛冶の神として崇めて「たたら製鉄」が行われた土地（富来隆先生）で、物部氏と深い関わり地である。

「たたら」に隣接した土地に火男火女神社（鶴見権現社）が鎮座されている。祭神は火軻具土命^{ひのかぐつち}で、貞観九年（八六七）鶴見山の爆発によって鶴見山上より現地に遷座したとなっている。火男火女神社が遷座される以前の同所には、五穀・鍛冶・鶴見山・物部氏等に関わりのある白鳥を祀った祠があったのではないかと思われるが…。



別府市春木川遺跡

「白鳥物語」の舞台としての別府

「餅が白鳥になった」の時代（六世紀）の別府は、鬼の岩屋一号・二号古墳（横穴石室）、太郎次郎塚古墳（縦穴石棺）が築造された時代である。

古墳は支配者の権力を誇示するため封土を盛り上げたもので、すべて手作業のため想像をはるかに超す労働力を必要としていた。つまり当時の別府には、古墳を築造するだけの支配者の集落が存在したことを物語っている。

春木川遺跡（弥生遺跡）では、水稻栽培を経済基盤とした古代の住居跡も出土している。（別府市史）春木川遺跡に近接した太郎次郎古墳に眠る人物は、別府水稻栽培集落の支配者であったことが考えられる。

別府の初期水稻栽培地は、春木川によって侵食された沼地に、後から運びこまれた土砂によって出来た湿地に、直蒔き栽培が弥生初期に行われたと予想される。その後、鉄器の普及改良（五世紀）によって土木工事（堰・水路）が容易となり、湧水・流水を利用した開田が春木川流域から扇山扇状台地へと行われていった。

春木川一帯の湧水線は、南須賀地区が標高四〇米、南

石垣三〇米、境川が二〇米と南北に扇状台地を横断している線と、南須賀には実相寺・森山・馬場・大畑・竹之内・小倉へと東西に縦断した带状との、二つの湧水線が存在している。（別府市史）

緩傾斜地おける一枚毎の水田は、造成労力の軽減と水を効率的に溜水（水温上昇）させるために、段差をつけた数十平方メートル規模に区切られたもので現在の棚田を思わせるものが想像される。この様式の水田は、その後の乾田栽培を容易にして収穫物の増産に大いに役立ったと思われる。

『風土記』に記されている「糧を餘して敵に宿め」は、乾田栽培による豊作の時の状態を記したもので、このような豊作を得るための乾田栽培は、当時の湿地では排水に問題があつて望めなかつた。

別府にも『風土記』に記されている百姓（おおみたから）といえる人物が存在したかを考えてみる。長者の誕生は、聖武天皇（天平一五年・七四三）の墾田永世私有許可がくだつてからで、八世紀以前は首長以外の富者は、

存在しえなかった。別府の水稲栽培氏族の首長（六世紀）として、実相寺遺跡の太郎・次郎古墳に眠る人物が考えられる。

その根拠として、

第一に「餅が白鳥になった」事件は、六世紀の出来ごとが考えられ、同じ六世紀に太郎・次郎古墳が築造されている。

第二、白鳥説話は、飛来した白鳥（鶴）を動機とした説話で、別府には白鳥の飛来地であった証しの地名

（鶴見・鶴見山）が存在している。

第三、弥生時代より別府春木川流域では、水稲栽培が行われていた。

第四、太郎・次郎塚古墳は、権力を表す封土を盛り上げた円墳である。

風土記に記されている「餅が白鳥になった」事件の舞台（速見郡の田野）は、現在の別府の鶴見地区から石垣地区に至る緩傾斜地といえないであろうか。（仮説）

別府の方が玖珠の田野（千町無田）よりいかに、「餅

が白鳥になった」説話の構成環境が優れているかを記す。

・白鳥との関係

別府には、古代白鳥の飛来事実を証する地名（鶴見・

鶴見山）が存在する。（飯田高原には白鳥の飛来を証す

る地名はない）

・水稲栽培に関する遺跡の存在

別府には古代の水稲栽培・集落・首長墳墓の遺跡があ

る。（飯田高原では、農耕稲作に関する遺跡は発見され

ていない）

・天変地変の災害

別府扇山扇状台地の緩傾斜は、過去の度重なる土石流によって形成されたものである。

（千町無田では、九重山の噴火以外に無田になるような災害は考えられない。九重山の噴火が四世紀から六世紀にかけてあったかどうかは不明。）

・タタラの存在

別府には古代物部氏と深い関係のタタラの地名が存在している。

（田野には存在していない）

・田野の地名

別府に欠けるものは、田野の地名のみであるが、別府にも災害を受けて田野と呼称した土地（扇山の山麓より石垣に至る一帯）があったが、開墾が進むにつれて田野の呼称は消失したと考えられる。

別府版「白鳥物語」

「餅が白鳥になった」事件の舞台（速見の田野）を別府に当てはめて、ストーリーを構成してみる。

今から一五〇〇年前の別府には、浅見川流域に海人族が春木川流域には農耕氏族が定住していた。

農耕氏族の首長は、もと々春木川流域の湿地と実相寺山麓の湧水による湿地を利用した水稻栽培を行っていたが、鉄器の普及によって土木工事が安易となり、春木川流水を堰止め水位を上げ水路に流して目的地に灌水する方法によって開田は広範囲に及んだ。また、湧水を水路に放水して灌漑に利用したによって、湧水利用がさらに広まり、水田は実相寺山山麓から扇山山麓へと拡大させていった。

東下がりの緩傾斜の地形に設けられた水田は、乾田栽培が取り入れられて、土地は肥沃に生まれ変わって連作も可能となり、あわせて水温上昇（日照）にも役立ち収穫は年々増大していった。それにつれて富は蓄積され、規模はさらに拡大が図られていき、六世紀の水稲栽培地は、速見の郡（石垣神社付近）の西南の方向に当たる扇山の山麓から石垣一帯に至る広大なものとなった。

収穫の増大は、余剰物を生みその分配処分の権限を持った首長は、次第に自己の富の蓄積を計るようになった。富と権力を手中に納めた首長は、自然の恩恵を忘れ神をも恐れぬ言動を行って、ついに神の怒りかかって土石流の災害を受けた水田は、岩石で埋まり再耕不能となった。収入源を失った首長一家は、没落しまもなく死滅したと。このストーリーで「別府版白鳥物語（仮説）」を作成すると、次のようになる。

「ある年のはじめ、別府の扇山の麓から石垣に至る一帯で水田経営を行っていた農耕氏族の首長兄弟は、一族の者を集めて新年祝賀の宴を開いたときの出来ごとである。

宴も終わりに近づいたとき酩酊した首長兄弟は、弓自慢を競って庭に出て矢を射ようとしたが、的になるべきものがなかった。そこで兄弟は一族の者の止めるのを振り切つて、床の間に飾られている鏡餅を庭に持出し的にして矢を射た。鏡餅を矢が射貫くやと思われたとき、鏡餅は白鳥となって空に舞い上がり、鶴見山に向かって飛び去った。

白鳥が鶴見山に到着したと思われた頃より、今までの好天は俄かに一変し、空は墨を流したような厚い曇に覆われ、雷鳴は鳴り響き、降り出した雨は瀧水のごとく地面を叩き音を立てて流れ、山肌に堆積されていた噴石噴土を押し流し、土石流を誘発させて扇山山麓から石垣に至る首長兄弟が経営する水田を総舐めにして、別府湾へと流れた。

大雨が止み土石流が鎮まった後に残った首長兄弟の水田は、石壊と泥に埋まった無残な姿のみであった。経済基盤の水田を無くした首長兄弟は、権威も失墜し一族の者たちからも見放され、ただ奈落の道を辿るのみで終には兄弟一家は死に絶えた。

首長兄弟の水田があった扇山から石垣に至る地区は、鶴見山の神の怒りをかけて、以後鶴見山の恩恵(温泉)を受けられない土地となつてしまった。

一族は、首長にふさわしい墳墓を造つて兄弟を葬つた。後世の人はこの墳墓を太郎次郎塚と呼んだ」と。

以上

参考資料

- 日本古典文学風土記・豊後國志・大分の歴史
- 山香町誌・杵築市史・別府市誌・大分県地方史
- 日本人の起源・日本の歴史・日本歴史と天皇
- 古代日本と海人・ヤマトの誕生・九州水軍国家の興亡
- 縄文から弥生への新歴史像・日本歴史のわかる本
- 古代人九九の謎・白鳥の古代史・白鳥伝説・白鳥物語
- 空白の四世紀・江南の文化と日本・古代日本の稲作
- お米とともに・朝日長者・九重町史・他